

非言語コミュニケーションとしての ケータイのディスプレイを見せる行為がもつ印象 ～大学生と高校生と比較して～

玉川学園高等部3年 磯矢花

研究動機

様々な先行研究論文を読む中で、非言語コミュニケーションは国によって同じ動作でも違う意味になることがあるということを知った。そこから、国の違いだけでなく、世代による違いもあるのか調べてみたいと思い、この研究をすることにした。

先行研究 中村・大江 (2010)

携帯の画面を見せる行為を非言語コミュニケーションとして捉えて、そのコミュニケーションの実態を調査している。そこから携帯をプライベートなものという結果を導き、携帯画面を見せる行為を非言語コミュニケーションとして捉える事が必要であると主張している。

アンケート概要

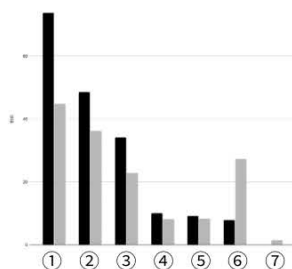
- ・中村・大江 (2010)と同じ研究デザイン
- ・Googleフォームを利用し、回答を依頼
- ・本校当時 (2022年) 2年生を対象
- ・129件の有効回答を得た

アンケート結果・考察

以下出てくるグラフでは、黒色のグラフは本研究の結果、灰色のグラフは中村・大江 (2010) の結果を示している。

問1では、興味のあるケータイサイトを周囲の人々に知らせようとするとき、どのような手段で伝えるのか、以下の7つの選択肢から選んでもらった。

- ① メール (LINE、DMを含む) を送る
- ② 話として口頭で伝える
- ③ ケータイ画面を直接見せる
- ④ ブログやSNSに書き込む
- ⑤ 電話をかける
- ⑥ 上記にはない
- ⑦ 伝えない



中村・大江 (2010) と比較した結果を左のグラフにまとめた。

問2では、問1に対して「ケータイ画面を直接見せる」行為を行う人と、行わない人を比較するため各選択肢を選んだ理由を自由形式で聞いた。

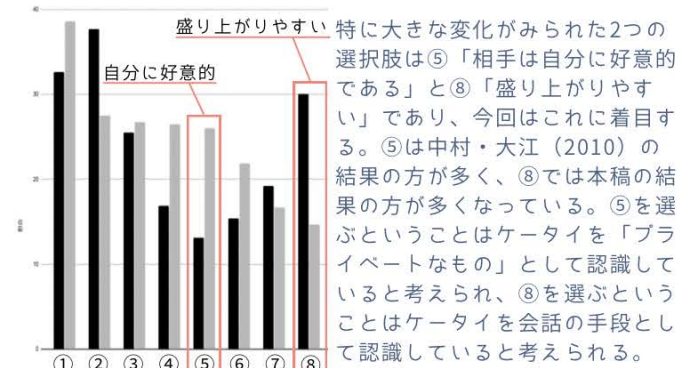
興味あるケータイサイトを知らせる方法について、「ケータイを直接見せる」を選ぶ被験者は、知らせたい相手と直接対面して伝えることを好んでいることが分かった。

問3では、知人と対面して話をしている時、話の流れで、相手のケータイ画面を見るように促して来た場合、その行為にどのような印象を持つか、選択形式で聞いた。中村・大江 (2010) と比較した結果を右上のグラフにまとめた。今回取り上げた選択肢の内容は以下の通りである。

- ①警戒していない
- ②分かりやすい
- ③論より証拠
- ④話のネタにいい
- ⑤自分に好意的
- ⑥趣味・人柄が解る
- ⑦何となく嬉しい
- ⑧盛り上がりやすい

参考文献

中村 (2008) 「親しい者を行う非言語コミュニケーション「ケータイのディスプレイを見る行為」とその多様化」、中村・大江 (2009) 「非言語コミュニケーション「ケータイのディスプレイを見る行為」における「気づき」の効果」、中村・大江 (2010) 『もうひとつの非言語コミュニケーション「ケータイのディスプレイを“見せる”行為』』、ルディン・サリト (2021) 「現代日本人の非言語コミュニケーションに関する研究—ボディランゲージとジェスチャーに注目して—」、叶峻峰 (2022) 「依頼に対する断り表現の考察：非言語コミュニケーションの視点から」、北村伊都子 (2023) 「マスク着用における笑顔の印象評定の文化差」、山崎大輔・篠崎彰彦 (2022) 「世界178カ国・地域の携帯電話普及に関する構造変化点分析—グローバルな普及加速期の特定—」、<https://www.tca.or.jp/database/> 「一般社団法人電気通信事業者協会」



問4では、ケータイのディスプレイを“見る”行為に対する印象について自由形式で聞いた。得られた回答を以下の6つに分類した。結果は下のグラフにまとめた。

- ①失礼な態度に憤慨
- ②相手の事情を推察
- ③相手の心情を推察
- ④自分の対応を反省
- ⑤何も思わない
- ⑥その他

問5では、話の話題になる画像を携帯に保存しているのかどうか「はい」か「いいえ」で回答してもらった。「はい」を選択したユーザーと、問1で「ケータイ画面を直接見せる」を選択したユーザーとの相関に注目する。両設問の結果を集計すると左の表のようになる。

本研究	持ち歩く	持ち歩かない	計
「直接見せる」	23	18	41
「直接見せる」以外	43	44	87
計	66	62	128

クロス集計の生起確率は48.09%と算出されることから、棄却率1%として、有意な相関は検出されなかった。すなわち、「ケータイ画面を直接見せる」方法を口コミ経路として利用することとネタ画像を保存・持ち歩く割合が高いことに関連がないことが確認できる。

クロス集計の生起確率は0.19%と算出されることから、棄却率1%として、有意な相関は検出された。すなわち、「ケータイ画面を直接見せる」方法を口コミ経路として利用するユーザーはネタ画像を保存・持ち歩く割合が高いことが確認できる。

先行研究では、携帯画面を直接見せることと、ネタ画像を保存・持ち歩くこととの関連が確認されたが、本研究ではその関連が確認されなかった。これは、携帯の使用がより身近になっていることが読み取れる。

まとめ
中村らの研究を高校生に実施したところ、先行研究とは異なる結果となった。したがって、20歳以上と高校生で同じ意味を持たないと考えられる。本研究では、携帯を見せる行為はますます浸透してきていることを示した。つまり、非言語コミュニケーションとして理解する必要性があるという面では中村らの主張を支持していると言えるだろう。